

穂高町における観光化の進展とその特徴

上 野 健 一 ・ 井 田 仁 康

I はじめに

第2次世界大戦後の高度経済成長期に至って、わが国に大量の観光需要が生れた。しかし、1970年代初期に第一次石油ショックが発生し、それ以後、日本の経済的成長は減速化することとなった。その結果、わが国の観光地域において多様な変化がみられる。中部山岳地域を擁する長野県においても、その観光化の進展に著しい地域的差異を生じている¹⁾。本稿は、長野県における近年の市町村別観光客数について若干の検討をくわえらるとともに、1970年代に著しく観光化が進展した南安曇郡穂高町を事例として、その観光化の地域的特徴を解明することを目的とした。

II 長野県における観光客の地域的傾向

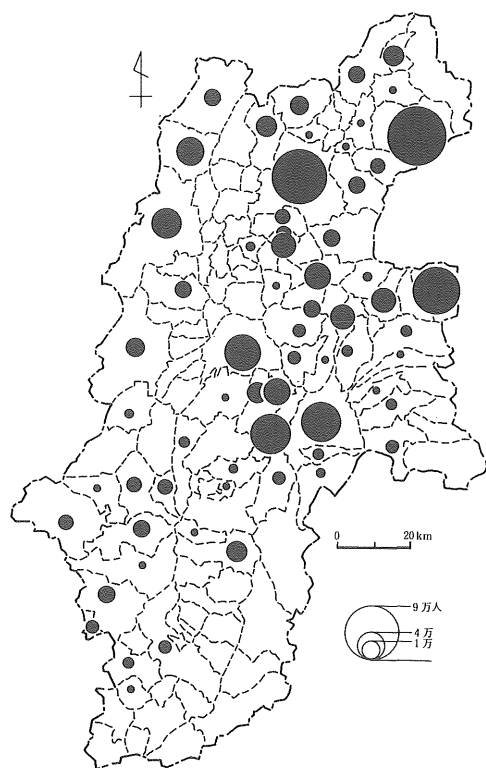
長野県は、わが国において有数の観光県である。しかし、1973年～1982年までの期間に、観光地利用者(以下、観光客と略記する)は、年間約8,000万でほとんど変化していない。また、この10年間、観光客の居住地について検討すると、約30%が長野県内客であるのに対し、約70%が県外客で、この比率もほとんど変化がみられない。さらに、県外客は主に京浜・中京・京阪神地域の居住者からなっている。また、日帰り客と宿泊客との比率は、1973年にそれぞれ50%ずつであったが、1982年には、53%と47%となって、日帰り客の方がやや増加していることがわかる。

つぎに、1972年～1982年までの11年間の長野県における観光客の地域的傾向について、検討

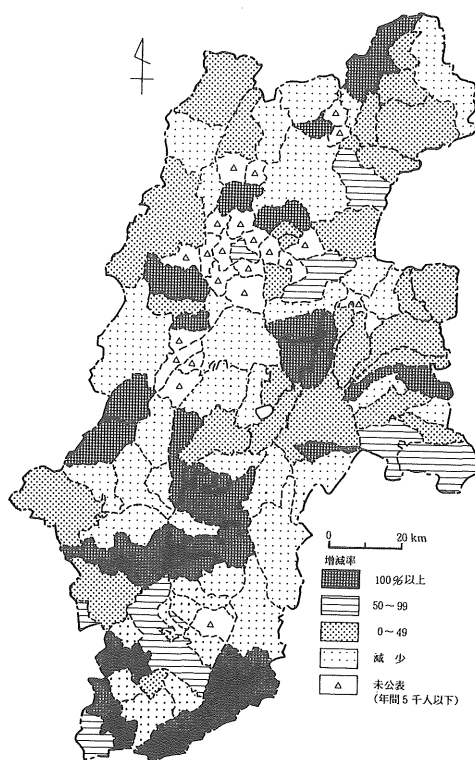
を行なってみよう。第1図-aは、1982年の市町村別観光客数を示したものである²⁾。また、第1図-bは、1972年～1982年の期間における観光客の増減を示したものである³⁾。第1図-aと第1図-bとによれば、長野県の市町村は、それぞれが観光地域を形成しているとみなせば、ほぼ5つのタイプに区分することができるであろう。

第1のタイプは、この11年間に観光客が増加した大規模観光地域である。これには、上田市(増加率53%)、軽井沢町(45%)、大町市(36%)、山の内町(30%)、諏訪市(11%)、下諏訪町(9%)、茅野市(4%)が属する。上田市は、別所温泉の観光客があまり増加していないにもかかわらず、上田城跡と信濃国分寺との観光客が著しく増加している。山の内町は、温田中・渋温泉の宿泊客が減少しているが、志賀高原のスキー客が急増している。軽井沢町は、浅間山麓で夏季の避暑客が増加している。諏訪市と茅野市、および下諏訪町は、諏訪湖と諏訪大社との観光客があまり変化していないのに対して、霧ヶ峰高原・蓼科高原・車山高原・八島高原などの避暑客およびスキー客が著しく増加しているので、ほぼ同じ傾向をもつといえる。大町市は黒部ダムと鹿島槍国際スキー場および青木三湖の観光客が増加している。

一方、第2のタイプは、この11年間に観光客の減少している大規模観光地域である。このタイプは、白馬村(-6%)、長野市(-5%)、と松本市(-5%)とが属する。白馬村では、白馬山麓のスキー客・冬山登山客がこの11年間、ほとんど変化していないにもかかわらず、白馬連峰の夏山



a) 市町村別観光客数(1982年)



d) 観光客の増減率(1982/1972年)

第1図 長野県における観光客の分布

登山客が減少しているために、全体として低下したのである。長野市は、善光寺・飯綱高原・川中島合戦戦跡のいずれにおいても、観光客が減少した。また、松本市は松本城および美ヶ原高原の観光客が増加しているにもかかわらず、浅間温泉と美ヶ原温泉郷との宿泊客が減少しているのである。しかし、これら3地域における観光客の減少率は小さい。

つぎに、第3のタイプは、この11年間に観光客の増加がみられる中規模観光地域である。これは、穂高町(427%)をはじめとして、飯山市(174%)、駒ヶ根市(123%)、立科町(38%)、真田町(30%)、野沢温泉村(22%)、小谷村(16%)と上山田町(3%)とを含む。穂高町は近年、安曇野の観光需要が著しく増大したのにもなって、急速に観光化が進んだ。また飯山市は、斑尾高原と戸狩とのスキー客が著しく増加しているのである。

そして駒ヶ根市は、中央アルプスの登山客がやや減少しているものの、駒ヶ根高原と光前寺を夏季に訪れる避暑客が増加している。さらに、立科町も蓼科牧場と東白樺湖とにおいて、夏季の避暑客が多い。また真田町は、菅平高原の観光開発が進んだ結果、夏季の避暑客、学生の合宿客にくわえて、冬季のスキー客が多い⁴⁾。さらに野沢温泉村は、冬季のスキー客が卓越し、民宿も多い⁵⁾。小谷村は、栂池高原のスキー客が増加している。そして、上山田町の温泉客はこの11年間でほとんど増加していない。

そして、1972年～1982年の11年間に観光客の減少している中規模観光地域が、第4のタイプである。これに属するのは、戸隠村(-32%)、信濃町(-25%)、小諸市(-24%)、安曇村(-23%)と岡谷市(-12%)との5市町村である。戸隠村は、戸隠神社を中心とした戸隠高原の避暑客が減少し

ている。また、これと隣接する信濃町は、黒姫高原におけるスキー客が増加しているにもかかわらず、野尻湖・一茶遺跡の観光客が減少している。さらに、小諸市は、高峰高原および市街地内の懐古園とともに観光客が減少傾向をもつ。また、安曇村は乗鞍火山の観光客が増加しているにもかかわらず、上高地の観光客が減少している⁶⁾。また、岡谷市は高ボッチ・鉢伏の避暑客が減少している。

そして、第5のタイプは、この11年間に観光客が著しく増加した小規模観光地域である。その観光客の増加率を50%以上と定めれば、22町村がこのタイプに区分されることとなる。それらをあげると、以下のごとくである。すなわち、北白樺高原を含む長門町(増加率2394%)、美ヶ原高原の観光化が進んだ和田村(147%)と武石村(100%)、ハケ岳山麓に位置して、大規模なペンション村が造られた原村(2047%)、野辺山高原をもつ南牧村(63%)、さらに、千曲川の上流に位置する川上村(76%)があげられる。これらにくわえて、飯綱高原の一部を含む牟礼村(807%)や差切峠が開発された坂北村(64%)、琅鶴湖が観光化された信州新町(166%)、安曇野の一部を占めて、室山公園を含む三郷村(529%)、野麦街道に沿う位置を占める奈川村(71%)があげられる。そして、木曽谷に沿う地域では、贅川・平沢・奈良井宿を擁する檜川村(393%)、旧飛騨街道と開田高原とを含む開田村(234%)、定勝寺・阿寺溪谷・のぞきど高原をもつ大桑村(286%)、島崎藤村の出身地の馬籠宿をもつ山口村(64%)があげられる。さらに、伊那谷に沿う地域で、大芝高原をもつ南箕輪村(602%)、千人塚および与田切溪谷の観光化が進んだ飯島町(146%)、しらびそ高原をもつ上村(133%)、南アルプスに近い南信濃村(300%)、中央自動車道の工事によって湧出した昼神温泉をもつ阿智村(1204%)、平谷高原をもつ平谷村(823%)、茶臼山高原・丸山高原の観光化が進んだ根羽村(74%)があげられる。

かくして、1972年～1982年までの長野県における観光地域は、以下に述べる特徴をもつといえよう。まず第1に、新しい観光地域の形成と発展

とをあげることができる。これは、その発展の特徴から、3つの地域的タイプが認められる。第1の地域的タイプは、一定の観光地域として既に形成されていたが、近年、新しい観光資源が急速に利用されることとなった地域である。これは、温泉観光とスキー観光とが結びついて観光客の増加した山ノ内町と野沢温泉村とを含む。また、夏季の避暑客と冬季のスキー客とによって、観光客の通年化が進んだ菅平高原を擁する真田町、および歴史的観光資源の開発が進んだ上田市とをあげることかできる。

第2の地域的タイプは、比較的大きな観光地域に隣接し、近年、観光客の増加している観光地域である。この地域的タイプは、白馬村の北に位置する小谷村、さらに安曇村と松本市とに近接する穂高町・堀金村・三郷村、松本市・諏訪市・茅野市にそれぞれ隣接する武石村・和田村・長門町・立科町・望月町などである。第3の地域的タイプは、従来ほとんど観光資源として重視されなかった歴史的・文化的文物と自然資源との観光利用に成功を収めた地域である。これは、木曽谷と伊那谷、および佐久谷の地域に広範に分布する。

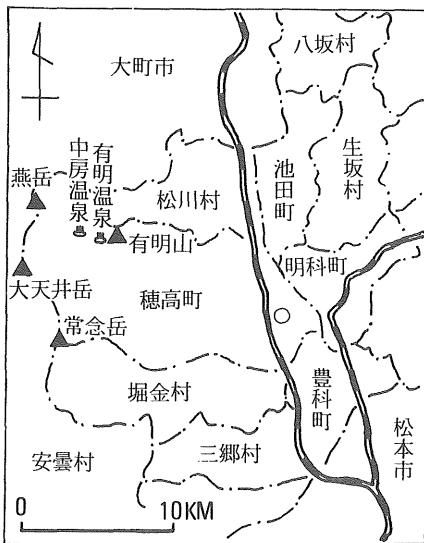
そして第2に、従来、長野県において比較的重要な地位を占めてきた多くの観光地域が、停滞傾向にあることである。それらをあげると、長野市・小諸市・松本市・戸隠村・白馬村・安曇村・丸子町・木曽福島町・上松町である。これらの観光施設は、神社・仏閣・名所・旧跡などと古くからの温泉である。近年、長野県において、観光客の観光行動は多様化し、さらに回遊性を増大させている。しかも、観光地域は、常に観光客からその新奇性と新鮮さを求められる⁷⁾。こうしたことから、上述した観光地が、観光施設の整備された物見遊山的観光地であるために、全般的に停滞傾向にあると考えられる。

そこでつぎに、長野県で近年著しく観光化の進展した穂高町を事例として、その観光化の特徴を解明する。

Ⅲ 穂高町における観光化の進展とその特徴

Ⅲ－１ 観光化の進展と観光資源

南安曇郡穂高町は、松本盆地のほぼ中央部に位置し、面積が146.21 km²、人口が22,230（1980年）である（第2図）。この町の西部は、北アルプスの一部を占める山岳地帯であり、また、その東部は中房川と烏川とによってそれぞれ作られた中房川扇状地と烏川扇状地との複合扇状地である⁸⁾。第2次世界大戦以前、扇状地面のほとんどは桑園として利用されていた。しかし、戦後に深井戸の掘削、電力揚水機の普及、縦横堰の整備、客土の実施などによって、桑園から水田へと転換した⁹⁾。そして、この水田化の成功によって、穂高町は長野県において重要な米の産地となった¹⁰⁾。



第2図 穂高町の位置

また、この町はわさび栽培が広範に行なわれている。穂高町の東部は、中房川扇状地と烏川扇状地とによって形成された複合扇状地の末端部にあるために、清涼な地下水が豊富に得られ、このことがわさびの栽培条件に適合している。わさび栽培の起源は明治時代の初期とされ、この時代には、松本盆地付近の局地的需要のみを満たす生産が行なわれていた。しかし、1911年に中央本線が全通するのにもなって、東京などの都市部で需要が高

まり、その結果、著しく生産量が増加した。わさび栽培とそれにとまうわさび加工業とは、穂高町における最大の産業である¹¹⁾。このように、1970年代初期までの穂高町は、米作とわさび産業とが最も重要な地位を占めていた。ただし、中房川の最上流部に位置する中房温泉は、松本盆地を中心として、関西・関東地方において、第2次世界大戦前から知られていた。しかし、それは農閑期の湯治場としての地位にとどまっていた¹²⁾。

ところが、1970年代に入ると、穂高町は急速に観光化が進んだ。このことを引き起こした大きい原因は、ジャーナリズムによる観光イメージの向上と観光客の多様化・若年化とであったと考えられる。まず、臼井吉見による長編小説「安曇野（五部作）」（1965年～1974年）がその先鞭となり、さらに、安曇野を舞台とするテレビドラマ「水色の時」（1975年4月～10月）がNHKから放映された。この両者によって、安曇野の中心的位置を占める穂高町の知名度が東京・名古屋・大阪などの大都市地域で著しく高まったのである。そして、これ以後若年女性向けの雑誌が、安曇野の紹介記事を頻繁に掲載することとなった。このため、学生やOLなどの若年女性層の観光客が急増したのである。その結果、穂高町の観光客は、1972年に16.5万、1975年に22.8万、さらに、1979年には88.8万をかぞえるほどに急増した。

さらに、穂高町の地理的位置も、その観光化の進展に関して重要な関連をもつ。穂高町は、東京および名古屋からいずれも約230kmの道路距離をもち、この両都市からの宿泊観光地として適切な位置を占めている。

このように穂高町において観光化が進んだ基本的条件として、穂高町が多様な観光資源をもっていた点を指摘しなければならない。それらは、以下に述べる3つに分類することができよう。まず第1に、自然的観光資源をあげることができる。穂高町は、標高700～800mの地域を境界として、地形的に、これよりも西部の山岳地域と、東部の複合扇状地地域とに2分される。この両地域の地形的コントラストが、アルプスを背景とした安

曇野のイメージを与えている。そして第2は、歴史的・文化的観光資源である。穂高町は、北アルプスの中央登山口であり、かつ、塩の道の千国街道に沿う位置を占めるために¹³⁾、山岳信仰の対象である神社仏閣と、集落における庶民信仰の対象である道祖神が多数分布し、観光対象となりうる文化的文物も多い。さらに第3は、産業的観光資源をあげることができる。穂高町は、わさび栽培・にじます養殖・天蚕飼育が盛んであり、これらは従来、重要な観光資源と考えられなかった。しかし、近年における観光対象の多様化にともなって、これらの地場的産業が急速に観光資源として認識されることとなった。もちろん、これらの産業も、穂高町のもつ自然的条件にもとづいて成立しているのである¹⁴⁾。

Ⅲ-2 観光地域の特徴と観光施設の分布

前節で述べた多数の観光資源を基礎に、ジャーナリズムのインパクトなどを受けることによって、1970年代、穂高町の観光化は著しく発展した。そして、その結果、観光施設が著しく増加したのである。1983年現在の穂高町における観光施設の分布を検討すると、それが自然的条件と関連をもつと推定される。すなわち、穂高町は中房温泉を含む西部の山岳地域、標高550～800mの扇状地上部地域、そして、標高550m以下の穂高駅を中心とする扇状地下部地域との3つの観光地域に区分することができる。これらは、観光施設の種類や特色がそれぞれ異なる。以下、この3地域別に検討してみよう。

1) 山岳地域

まず、標高800m以上の穂高町西部の山岳地域は、中房温泉・有明温泉、および多数の山小屋などの観光施設が分布する。中房温泉は、湯量が豊富な単純硫黄泉であり、江戸時代末期に一日市場(現三郷村)の百瀬茂八郎が温泉旅館を創業し、これ以後、農閑期の湯治場として多くの客を集めた。そして、明治時代に入ると、有明講社が盛んになるのにもなって、有明山へ登山する修験者の宿泊地となった。さらに大正時代以後、燕岳・大天井岳・常念岳を結ぶ北アルプスの中央登山口

として発展した¹⁵⁾。1983年現在、この温泉は1軒のみの旅館からなるが、その収容力は500人に達する。有明温泉は、中房温泉よりも約300m下流に1949年発見され、町営国民宿舎有明荘からなる。この収容力は約400人であって、湯治客や団体客が多い。これらの他に、この地域は4つの山小屋が分布する。それらは、中房温泉を起点とする燕岳方面の登山道沿いに、合戦小屋(休憩・売店のみ)と燕山荘(民営、収容人員600人)、大天井岳の山頂付近に大天荘(町営、収容人員200人)、さらに常念岳の北側に常念小屋(民営、収容人員300人)である。かくして、穂高町西部の山岳地域は、温泉観光と登山とに特徴をもつのである。

2) 扇状地上部地域

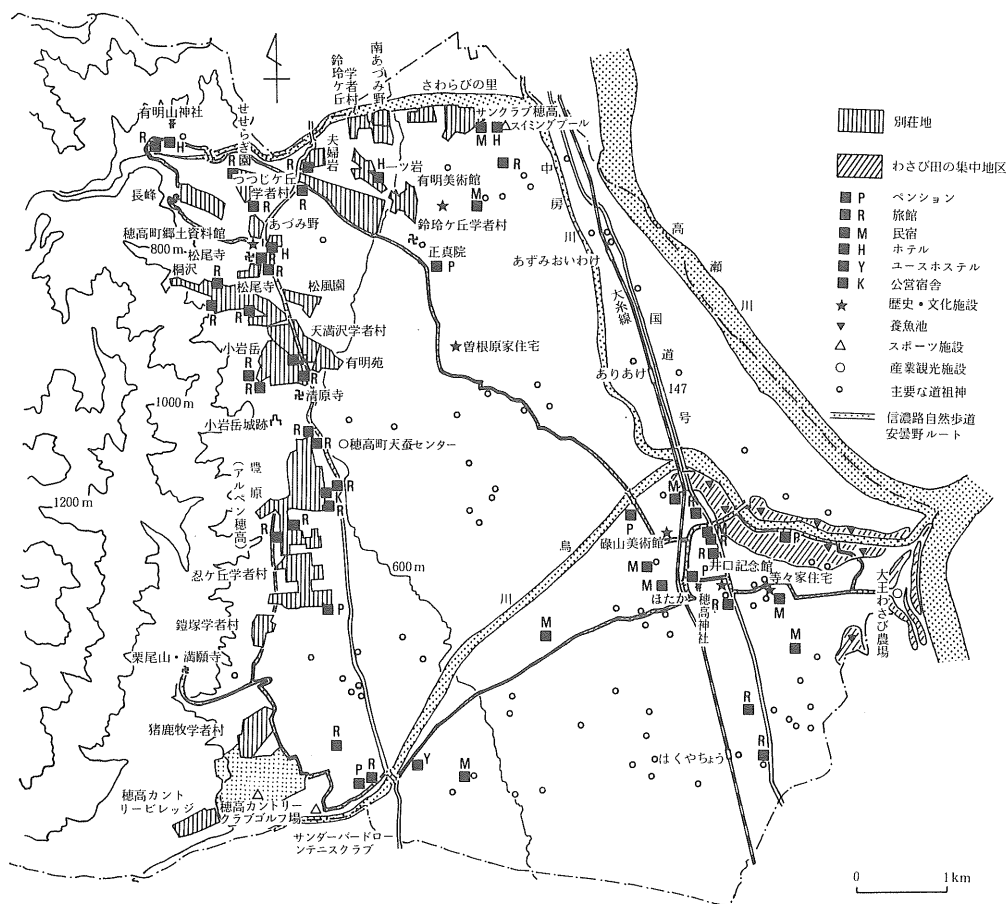
この地域においてもっとも顕著なのが、宿泊施設とスポーツ施設とである。宿泊施設は、さらに別荘地と旅館・ホテル・民宿などの短期的な宿泊客を対象としたものとに区分される。

穂高町における別荘地開発の過程は、中房温泉の冬季利用との関連が大きい。中房温泉は冬季の積雪が多いために、晩秋季から初春季まではこれを利用できなかった。この温泉の冬季利用は、明治時代にこれを中房川の下流部へ引湯したことにはじまる。昭和初期に引湯のために木管が使われ、これは後に京信産業に引き継がれ、第2次世界大戦後の高度経済成長期に至って、別荘地開発と結びついた。穂高町の富士尾山と浅川山とを結ぶ線よりも西部の林野はすべて国有林であるが、これよりも東部はすべて民有林である。しかも、農業林野というべき私有林であった。したがって、この地域で穂高町が直接的に別荘地開発を行なうことは困難であった。このため、穂高町当局は民間会社に開発行為を委ね、これを指導し、後述する第3セクターの温泉開発公社がその一部を管理する方法がとられた。1960年代の別荘地開発の初期、町当局は別荘地に温泉を引き込むことを計画していなかった。このため、町有地も一部で提供されてこの時期に開発・造成された別荘地は温泉を引き込まず、それらは「学者村」と呼称される。この事業主体は、いずれも東京都に本社をもつ高

原計画であり、1965年頃から分譲を開始した。この学者村は町営水道が引かれ、学者村管理事務所がその維持・管理にあっている。そして、分譲地の購入者は、医者・公務員・大学教授などの社会的地位の高い職業についているものが多い。高原計画は、一般的な宣伝活動を一切行わず、もっぱら購入者などからの紹介によって分譲を進めている。学者村の1982年末における造成済の区画は、6ヶ所の合計が1,389であり、その約20%が分譲済となっている(第3図、第1表)。

その後、1970年代に至って、有明温泉を冬季に利用することの要請が強まり、1970年に穂高町温泉開発公社が設立された。また、1971年7月に長野県自然保護条令が制定され、別荘地開発に一定の条件が求められることとなった。穂高町は、

1983年現在、「穂高町自然保護等指導基準」を制定し、宅地開発行為等の指導・監督を行なっている¹⁶⁾。そして、この1970年代に至って、穂高町の別荘地開発が急速に増加し、それらのほとんどがこの扇状地上部地域で行なわれた。別荘地の開発主体は、役場の資料によれば21社に達し、東京都と名古屋市に本社を置くものが多い。それらについて、地元の穂高町・松本市・大町市の会社と大阪市・京都市に本社をもつ会社もあげられる。こうした別荘地開発を行なう会社の本社所在地の分布は、一定程度まで、別荘の需要者の分布と一致しうると考えられる。例えば、1979年までの穂高町における温泉付別荘地の購入者328名の出身地を検討すると、南安曇郡が44名(13%)、松本市が67名(20%)、関東地方が52名(16%)、



第3図 穂高町の観光施設と別荘地(役場資料により作成)

第 1 表 穂高町の別荘地開発

区分	名 称	事業主体(所在地)	開発年度	造成区画	分譲区画 (1982年末)	維持管理	温泉 引湯
学 者 村	鈴玲ヶ丘	高原計画(東京都)	1960年代	665	122	学者村管理事務所	無
	天 嵩 沢	同 上	同 上	236	40	同 上	無
	忍 ヶ 丘	同 上	同 上	220	55	同 上	無
	猪 鹿 牧	同 上	同 上	197	24	同 上	無
	鎧 塚	同 上	同 上	40	9	同 上	無
	つつじヶ丘	同 上	同 上	31	9	同 上	無
別 荘 分 譲 地	小 岩 岳	立花産業(東京都)	1969～1970年	350	213	穂高町温泉開発公社	有
	夫 婦 岩	同 上	1969年	41	27	同 上	有
	一 つ 岩	同 上	1969年	55	31	同 上	有
	南あづみ野	同 上	1969年	26	15	同 上	有
	カントリービレッジ	伊 吹(京都市)	1971～1972年	62	10	自 主	無
	有 明 苑	信濃産業(名古屋市)	1972年	45	26	自 主	有
	せせらぎ園	丸正開発(名古屋市)	1972年	58	26	穂高町温泉開発公社	有
	豊里(アルペン穂高)	立花産業(東京都)	1972～1973年	215	71	同 上	有
	桐 沢	三生興産(東京都)	1973年	113	39	同 上	有
	松 風 園	名和観光(名古屋市)	1973年	53	38	同 上	有
	あづみ野	同 上	1973年	57	30	同 上	有
	ありあけ高原	住友商事(東京都)	1973年	50	18	同 上	有
	長 峰 a	全日空ビルディング(大阪市)	1973年	37	14	自 主	有
	さわらびの里	大信相互(大町市)	1973～1974年	181	62	自 主	有
	宮 城 園	栄 和(穂高町)	1973～1974年	18	18	自 主	無
	長 峰 b	名和観光(名古屋市)	1973～1974年	112	5	自 主	有
地	松 尾 寺	望月地所(松本市)	1974年	30	18	自 主	有
	松尾寺団地	東明ほか2社(穂高町)	1975年	22	13	自 主	有
	四 ツ 堀	仁科不動産(穂高町)	1975～1976年	13	2	自 主	無

(役場資料により作成)

中京・関西地方が111名(34%)となり、地元出身者に比較して、関東・中京・関西地方出身者の多いことが明らかとなる。

つぎに、1972年～1973年に別荘地造成が行なわれた、大字有明地区の「アルペン穂高」を事例として述べる。これは東京都杉並区に本社を置く立花産業が開発した¹⁷⁾。そして、1983年現在、215区画が造成され、町道・汚水処理場・電気・プロパンガス・町営水道等が完備し、1区画につき1口の温泉が引き込まれている。聞き取り調査によれば、この別荘購入者のほぼ60%は松本盆地の在住者であり、残りの約30%は関西地方在住者、約10%が関東地方在住者である。すなわち、この別荘分譲地の購入者は、地元在住者の割合が比較的大きいようである。これは、別荘地が温泉を引湯しているために、温泉入湯を重視する地元在住者の多いことと、この開発主体の立花産業が地元と比較的知名度のあることによると考えられる。そして、別荘を購入するためにはかなりの資金が必要であるために、開発状態に関して、多く

の情報が入手しうる地元在住者の割合が大きくなると考えられる¹⁸⁾。

つぎに、別荘以外の宿泊施設として、旅館・ホテル・民宿・ペンションなどをあげることができる。この地域におけるこうした施設のほとんどは、信州穂高高原温泉旅館組合と中房天然温泉旅館組合とのいずれかに所属している。後者は、1981年に前者から分離した8軒の業者によって設立された。そして、1983年現在、前者の加盟者が18軒後者の加盟者が11軒である。ただし、この地域の旅館業者のすべてがこれらの組合に加盟しているのではなく、穂高駅付近の業者によって組織された穂高町観光旅館組合に加盟する業者も若干みられる。

信州穂高高原温泉旅館組合に加盟する組合員は、ホテル・旅館・ペンションが多く、民宿は少ない。それらの経営者は、ほとんど穂高町以外の出身者で占められ、地元出身者は3軒にすぎない。豊科町などの隣接町村の出身者が多い。冬季は年末年始などの多客時を除いて休業する者もみられるが、

経営規模は比較的大きく、収容人員が20人～40人の専門業者が多い。これらの旅館は、後述する穂高町温泉開発公社から温泉給湯を受けている。この組合に加盟する町営S荘の宿泊客および入湯客の経年変化をたどると、このS荘が1973年に開設されて以来、延宿泊客のピークは1974年度、日帰客と入湯客とのピークは1976年度であることがそれぞれ明らかとなった。そして、これ以後それぞれの客数は大きい変化を示さない¹⁹⁾。中房天然温泉旅館組合は、高原温泉旅館組合よりも、観光開発に関して積極的な姿勢をもつ業者によって組織されたようである。

そこでつぎに、これらの別荘と旅館などへ温泉給湯を行ない、さらに別荘地の一部の維持・管理を行なう穂高町温泉開発公社について述べる。この公社は、1970年に設立され、その設立時における出資比率は、穂高町が40%、立花産業と京信産業との合計が50%、さらに林野弘済会が10%であった。しかし、1983年現在の出資比率は、穂高町が60%、その他3者の合計が40%であり、穂高町の出資比率が増大している。この公社は、前述した有明温泉からの引湯を安定的に行なうために設立された。引湯管を設置する中房川の沿岸はほとんど民有地であるために、それらの地区を借り上げて、1972年に引湯を開始した。この温泉は泉源で81.7℃であるが、引湯本管だけでも延長約16kmに達し、給湯される末端配管での温度は、約45℃となる。泉源の有明温泉は、毎分2,000ℓの湧出量をもち、その中の約1,700ℓが送湯されている。温泉の引湯権は、20年間の期限付きであり、その利用者は基本分担金として当初60万円を負担したが、1982年現在、これは110万円となっている。この20年という当初の権利期限は、引湯配管の耐用年数である。そして、引湯量は、一般の旅館が5口以上を基本として、1軒で10口以上の大口の利用者が多く、別荘は1軒で1口である²⁰⁾。1982年までの引湯申し込み口数の合計は1,886口に達し、これには温泉付別荘約800戸が含まれている。そして、穂高町の山麓部において温泉を利用する建物は、1982年1月現在で宿泊施

設が26、会社や団体の寮が35、別荘が843に達する(一部安曇村を含む)。

つぎに、この扇状地の上部地域は、スポーツ施設が分布することも特徴としてあげることができる。それらは穂高川の左岸に位置を占める穂高カントリークラブゴルフ場とサンダーバードローンテニスクラブとであり、町の北東部中房川の右岸に位置するサンクラブ穂高の温水プールとである。前2者はいずれも穂高カントリークラブ(本社は東京都)が経営する会員制のクラブである²¹⁾。

そしてさらに、歴史・文化施設もこの地域に多く分布する。すなわち、有明山神社、つつじ園をもつ栗尾山満願寺、室町時代に建立された重要文化財の松尾寺薬師堂、江戸時代前期に建てられた重要文化財の曾根原家住宅、穂高町郷土資料館、有明美術館などである。さらに、扇状地面に古くから立地する富田・荒神堂・牧・柏原などの集落には、多くの道祖神が祭祀されている。これらの歴史・文化施設が、この地域において観光客の観光行動の結節点としての役割を果たしているのである。また、穂高町天蚕センターは、産業観光施設であるといえよう²²⁾。

かくして、扇頂・扇央地域は宿泊施設の開発が進み、さらにスポーツ施設と歴史・文化施設を結節点として観光地域が形成されていることが明らかになったといえよう。そして、それら宿泊施設の建設は、民間会社によって行なわれ、穂高町は建設の際の指導行為と温泉開発公社によってそれらの一部を管理するという間接的な役割を果たしているといえるであろう。

3) 扇状地下部地域

そこでつぎに、穂高駅を中心とする扇状地下部地域の特徴について述べてみたい。この地域は、産業景観・産業施設と歴史・文化施設とに、もっとも特徴がみられる。産業景観・産業施設として、わさび産業とにじますの養殖業とがあげられる。しかし、この後者はいまだ産業景観としての地位にとどまっているために、これに関連した観光施設を産むまでに至っていない。

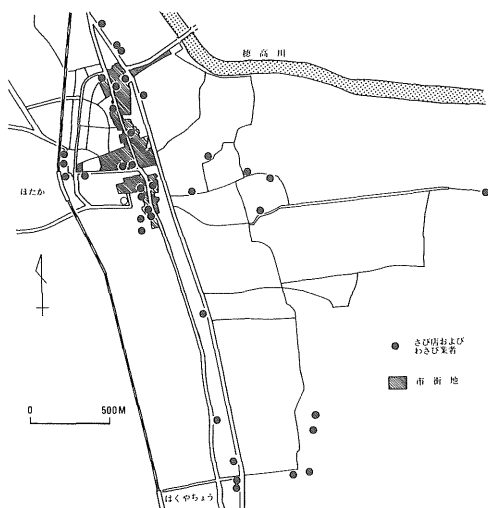
これに対してわさび産業は、観光客の増加によ

って観光わさび園が整備され、さらにわさび小売店が簇出した。わさび田は穂高町の市街地周辺の小河川沿いに分布しているが、町の東部、等々力地区に広範に分布している。そのもっとも東部に位置するのが御法田の大王わさび農場である。ここは、穂高町における観光コースの中心的な地位を占めており、わさび田の見学コース・観光バスの駐車場・土産品店・レストランなどが整備されている。また、市街地を中心として多くのわさび店が分布している(第4図)。聞き取り調査によれば、1960年代前半まで、わさび販売店は7,8軒であった。ところが、1970年代以降の観光客の増加によって、わさび販売店は急速に増加した。市街地を中心とする11業者に調査した結果、1975年以降に店舗を新築ないし改築したものが5業者みられた。もっともわさび業者は、生産のみを行なうもの、生産・加工・販売を一貫して行なうもの、加工のみの業者、販売のみの業者などさまざまな形態をとっている。しかし、現地観察によれば、ほとんどの業者は店舗をもっており、とくに穂高駅周辺は大きい店舗が分布する。聞き取り調査した11業者の内訳は、生わさびの加工と店頭販売とによってほぼ2分の1ずつの収入を得る業者が5、

店頭販売のみの業者が3、加工に重点を置く業者が3である。そして、この加工に重点を置く業者は、市街地の周辺部に多く分布し、6人～7人の従業員を雇用して、長野県から名古屋・東京へ出荷している業者もみられる。

つぎに歴史・文化施設もこの地域に多数分布する。それらをあげると、安曇族の祖神を祭祀する穂高神社、江戸時代に松本藩主の本陣として利用された町文化財の等々力家住宅、さらに、井口喜源治記念館、日本近代彫刻の先覚者であった荻原礫山の作品を展示する礫山美術館などである。これらが穂高町の市街地における観光コースの一部を形成しているのである。そして、等々力地区を中心として道祖神も多数分布している。

また、この地域は、穂高町における観光客の基地的機能を果しており、宿泊施設が多い。穂高町観光旅館組合は、市街地付近の業者によって組織されている。その組合員は、旅館5、民宿9、ペンション8の合計22である(1983年現在)。この旅館組合は、第2次世界大戦前から所在した4軒の旅館を中心として結成されたものである。これらの旅館は、大糸線開通以前から所在し、松本と大町・白馬方面との間を往来する行商人が多く投宿した。ところが、前述した安曇野ブームの影響を受けて観光客が急増し、宿泊施設の需要が生じた。かくして、1975年頃より民宿が発生し、以後、毎年2、3軒の割合でこれが増加している。しかし、22軒の中で専門者は、旅館・民宿・ペンションともにそれぞれ2、3軒ずつしかない。その他はすべて兼業形態をとっている。それは、宿泊客が夏季に集中し、冬季の需要が充分でないためであり、このため11月末から3月までの期間休業する業者が多い。民宿の半数以上は農家の兼業である。こうした兼業形態の民宿は、多くの場合主婦によってサービスが提供されており、その規模は3、4部屋、収容人員も15人以内の零細経営である²³⁾。2・3の専門的民宿は、50名以上の収容人員をもつ。もっとも大きい専門的民宿H屋は、夏季の7、8月に関西地方および関東地方からの大学生の合宿客を固定客として経営を行なっ



第4図 穂高町主要部におけるわさび店およびわさび業者の分布
(信州山葵農業協同組合員名簿と現地調査とによって作成)

いる。また、近年、ペンションの増加がこの地域で著しい。ペンションは、民宿よりも多少料金が高くなるが、比較的良質なサービスが受けられるという点から若年者を中心に人気がある。ペンション宿泊客の多くは、若年女性や合宿の学生などである。こうした宿泊施設に加えて、市街地には多数のレンタサイクル店も分布している。それらの多くは、自転車店・土産品店などと兼業している。

かくして、扇状地下部地域は、産業景観・産業施設および歴史・文化施設を中心として、これらに民宿・ペンション・旅館・レンタサイクル店・土産品店などが加わることによって、観光地域が形成されていることが明らかになったといえる。

IV むすび

本稿は、近年の長野県における観光地域の変化について概観し、さらに、南安曇郡穂高町を事例として、その特色を明らかにした。ここで、穂高町における観光化とその特徴についてまとめてみる。穂高町の観光地域は、山岳地域、扇状地上部地域、扇状地下部地域の3つに区分することができた。これら3つの地域は、観光施設および観光客の特徴などがそれぞれ異なる。山岳地域は、北

アルプスの登山と中房・有明温泉の入湯である。扇状地上部地域は、引湯された温泉を利用する別荘・旅館と歴史・文化施設に特徴をもつ。扇状地下部地域は、産業景観・施設と歴史・文化施設を中心として、宿泊施設も多く分布し、さらに観光客の根拠地でもある。そして、後者の2つに共通して設けられているのが、信濃路自然歩道安曇野ルート(延長約32km)である。こうしたことから、これら3つの地域それぞれの観光開発への対応も若干異なるようである。山岳地域はほとんどが中部山岳国立公園に含まれるために、急速な観光化は不可能である。扇状地上部地域は、別荘地などの比較的大規模な観光開発が行なわれている。そして、宿泊業者や別荘地開発業者は積極的な意識をもつものが多い。穂高町はこれに関して間接的に影響を行使している。一方、扇状地下部地域はわさび田を中心とする産業景観・施設を観光施設として重視している。このために、扇状地上部の大規模な開発に関して消極的姿勢をとる傾向が強いようである。こうしたことから、穂高町のこれら3つの観光地域を有機的に結びつけて開発していく方法をさがることが、今後のこの地域における最大の課題といえよう。

本稿の作成に際して、筑波大学地球科学系の奥野隆史、斉藤 功両先生の御指導をいただきました。また、現地調査において、信州大学繊維学部宮坂正治先生、長野県庁の井上 巖氏、穂高町役場の中島芳孝氏、穂高町温泉開発公社の塚田 明氏、立花産業株式会社の足立俊一氏の御協力をいただきました。その他現地調査に御助力いただきました多数の方々に深く感謝申し上げます。

〔注および参考文献〕

- 1) 市川健夫(1983): 観光地の調査(一)地理, 28-4, 88~89.
- 2) 第1図は、観光地利用客が年間8万以上の市町村のみを記載する。「観光地利用者統計調査結果」は、長野県内を8つの観光地ブロックに区分して、それぞれのブロックに含まれる観光地別に結果が表示されている。したがって、例えば上田市において、信濃国分寺・上田城跡・須川湖はそれぞれ浅間高原ブロックへ区分され、別所温泉は八ヶ岳中信高原ブロックへそれぞれ区分されている。しかし、本稿は、便宜上市町村別に観光地をまとめて分析を行なう。
- 3) 「観光地利用者統計調査結果」は、観光客が年間延5,000人以上の地区についてのみ公表されている。長野県商工部観光課(1980): 『長野県観光地利用者調査実施要領』, 2~3.
- 4) 山本正三・石井英也・田林 明・手塚 章(1981): 中央高地における集落発展の一類型—長野県菅

平高原の例一．筑波大学地球科学系人文地理学研究，V，104～122.

- 5) 白坂 蕃(1976)：野沢温泉村におけるスキー場の立地と発展．地理学評論，49，341～360.
- 6) 市川健夫・白坂 蕃(1976)：乗鞍火山麓の人文地理．長野県：『乗鞍の自然と文化 ―総合学術調査報告書―』，52～67.
- 7) 長野県商工部観光課(1982)：『中央自動車道西宮線県内全線開通に伴う観光客流動調査結果』，(その1)，(その2)，79ページ，102ページ.
- 8) 南安曇郡誌改訂編纂会(1979)：『南安曇郡誌』，第一巻，175～187.
- 9) 南安曇郡誌改訂編纂会(1974)：『南安曇郡誌』，第三巻上，437～463.
- 10) 穂高町の農家1戸当りの水田経営面積は，0.76ha(1980年)に達し，長野県においてもっとも大きいグループである．
- 11) 日本地誌研究所(1972)：『日本地誌第11巻長野県・山梨県・静岡県』，二宮書店，151～152.
宇留賀浜雄(1977)：『穂高わさびの歴史と栽培・加工法』，信州山葵農業協同組合，104ページ.
わさび栽培に関しては，目下，山本 充が営為調査中であるので，詳細はそちらにゆずる．
- 12) 南安曇郡誌改訂編纂会(1971)：『南安曇郡誌』，第三巻下，807～809.
- 13) 富岡儀八(1983)：『塩の道を探る』岩波書店，146～149.
- 14) 中田令夫(1980)：北アルプス烏川流域の地理．北アルプス烏川流域の自然と文化総合学術調査報告書，41～73.
- 15) 前掲12) 807～811.
- 16) 「穂高町自然保護等指導基準」は，長野県自然保護条例等の主旨に基づいて作られており，宅地等の開発面積は一区画平均で1,000m²以上，別荘の建ぺい率は20%以下で，かつ延面積が1,000m²以下であることなどを内容として定められている．
- 17) 立花産業の設立者は，中房温泉の引湯に関連をもつ京信産業出身者であり，穂高町との関連が強い．
- 18) アルペン穂高別荘分譲地の1m²あたりの分譲価格は，1983年現在で13,000円～14,000円，1区画あたりの分譲敷地面積は900m²～3,200m²である．したがって，この別荘の購入には，最低1,000万円の資金が必要である．
- 19) 町営S荘の1982年度における宿泊客は，延13,400人，日帰り客は13,700人，入湯客は83,200人であった．
- 20) 温泉引湯一口の給湯量は，毎月30m³で，その使用料金は1982年現在で5,500円であり，使用量がこれよりも1m³増加すると300円追加徴集される．
- 21) サンダーバードローンテニスクラブは，14面の全天候型コートを備え，夏季に利用者が集中するが，冬季にも松本方面の会員などでかなり利用者がある．
- 22) 穂高町有明地区は，江戸時代から明治時代の期間，この地域の広範なくぬぎ林・なら林での天蚕飼育が行われた．これは，現在，長野県および穂高町によって，保護・育成されている．天蚕飼育を含むくぬぎ林野の利用に関して，目下，丸山浩明が鋭意調査中であるので，詳細はそちらにゆずる．
- 23) 民宿は零細経営者が多いために，宿泊サービスに業者間の差異がみられ，このため固定的な宿泊客の確保が充分できない．